

---

# 流星らびっと

維川 千四号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星らびっと

### 【Nコード】

N3579L

### 【作者名】

維川 千四号

### 【あらすじ】

「BUMP OF CHICKEN」さんの「天体観測」のその後をイメージして書いた作品です。  
もしイメージを壊してしまったら、すみません。

高く、高く。(前書き)

その昔、突然思い立って書いた作品です。  
かなり拙い文章ですが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

高く、高く。

高く、高く。

駆け出す時も、加速する時も、地面を蹴る時も、バーを越える瞬間まで、ずっと願っている。

マットに仰向けになって、亜理沙は空を見上げた。一番星と宇宙ステーションがキラキラと輝いていた。

\*\*\* 亜理沙の日記 \*\*\*

家に近い高校を選び、中学と同じく陸上部を選び、そして同じく走り高跳びを選んだ。

制服と友達が変わっただけの高校生活。授業にはギリギリ追い付いてる、つもり。

毎日は昨日の続き。変わったようで、何も変わらない。世界は灰色に、徐々に確実に、くすんでいった。

高校一年の夏の終わり。私を包んでいた灰色のフィルターが音を立って割れた。

工藤真也。頭が良くて、スポーツも出来て、格好良くて、皆の憧れで、そして誰にでも優しい、一つ上の先輩。

文化祭で同じ班になった。すぐに好きになった。毎日が鮮やかな色で、キラキラして見えた。楽しくて、嬉しくて、そして苦しくなった。

「頑張ってるね、宇佐見さん」  
声を掛けてくれたのは、文化祭もとつくに終わった冬の始め。私の名前なんて忘れてると思っていた。

こんな所にどうしたんですか？、と聞いた。声は少し裏返った気がした。放課後の体育館に先輩が来ることは、今までなかった。

「電気がついてるから、まだ誰かいるのかなって思ってた」

確かに外はもう暗くて、校内にいる人も数える程度。そして体育館には自主練で残った私一人。

先輩と合わせて二人。二人きりだった。

先輩はこんな時間にどうしたんですか？、と聞いた。今度の声は完全に裏返った。

それを気にせず、先輩は教えてくれた。

たまに学校の屋上で星を見ていること。晴れるのを待ったけど、今日は雲で見えないこと。

星なんて最近ちゃんと見てないな、となんとなく言った。

「それなら今度一緒に天体観測しない？」

私は即答した。

その日の帰り道、私の自転車は風より速かった、と思う。

二週間経った。星のことを勉強した。テストより、受験より一生懸命に。

集合場所は、街はずれの高台の小さな公園。三日前に先輩がわざわざ教室まで来て、知らせてくれた。クラスの女子には、私が睨まれた気がした。

街の光は少し遠くに見え、夜空の光は少し近くに見えた。心臓が耳の隣にあるように、自分の鼓動が聞こえた。

集合時間よりは早く着いたけど、そこにはもう三人いた。先輩の親友でクラスメートの高坂先輩と、その妹の由香ちゃん、中学一年生。

「いつものメンバーなんだ」

先輩が教えてくれた。

二人きりじゃないんだ、と思ったが、二人きりじゃなくて良かった、とも思った。

先輩の持ってきてくれた望遠鏡を、皆で順番に覗いた。先輩は位置を調整するたびに、その星のことを教えてくれた。

真也の親父さん天文学者なんだ、と高坂先輩は教えてくれた。宇宙ステーションで研究員として働いていることも。

空を見上げた、宇宙ステーションを探して。

光が一つ流れた。

流れ星だ、と由香ちゃんのはしゃいだ。先輩二人は見逃したみたいだ。私は、強く強く、願った。

それから天体観測に先輩は何回も誘ってくれた。いつも同じ四人だったけど、嬉しかった。少しずつ、心が近づいた気がした。そして、先輩の卒業が近づいていた。

受験の時期になり、学校でも先輩二人に会うことは少なくなった。後半はまったく会えなくなった。

私は、手紙を書いた。今どき手紙って、と思ったけど、手紙を書いた。卒業式をラストチャンスと決めた。

卒業式当日、先輩の姿は体育館になかった。

式が終わって、慌ててすぐに先輩の教室に向かった。

昨日出発になったんだ真也、と教室にいた高坂先輩は教えてくれた。

宇宙技師候補生に受かったことも。シャトル打ち上げの関係で、

予定が早まったことも。三年は地球に戻って来れないことも。別れのあいさつも出来なくてゴメン、と私への伝言も。

手紙がポケットの中に残った。

春休みの間、何もやる気がしなかった。ただ時間を見送った。始業式の前の夜、久々に高台の公園に行った。もちろん誰もいなかった。

ベンチに座って、空を見上げた、何も考えずに。

光が一つ流れた。

今度は何も願えなかった。あの時の願いは届かなかった。

いや、まだ届いてないだけ。

始業式の後、陸上部をやめた。

それから一年間、必死で勉強した。宇宙技師候補生になるためだけに。英語嫌いじゃなくて良かった、と心の底から思った。

流れ星は私の手紙を届けてはくれないみたいだ。

高校生活、最後のジャンプは、自己ベストを更新した。もうすぐ、私は宇宙に行く。手紙はポケットに入れて。

高く、高く。

点火の時も、空を駆け上がる時も、大気圏を抜ける時も、あなたに会える瞬間まで、ずっと願っている。



空を見る。

空を見る。

足元を見ず、目の前を見ず。

空を見る。

\*\*\*地球より、君へ\*\*\*

今日の空は雲で覆われてて、星が見えない。

多分、君のいる場所は、毎日星が見えるんだろう。

さつき、陸上部の女の子が頑張って自主練してた。

なんとなく、君に似て見えた。

結局、バスケで君に勝てたことなかった気がする。

でも、今なら負ける気がしない。練習もしたし、なにより背が伸

びたから。

あれから、もう三年経ったんだ。今思うと、短かった気がする。

そういえば、最初の天体観測のこと、覚えてる？

多分、もう忘れたって君はとぼけるだろうけど、僕はまだ鮮明に

覚えてる。

だって、おなか痛くなる程笑ったの、あれが初めてだったから。

でも、その後のこともちゃんと覚えてるよ。念の為。

そういえば、君に報告があるんだ。多分、驚くと思う。

実は僕、

窓を叩く、小さく細かい、音で真也はペンを置いた。

どうやら外は雨の様だ。窓が濡れていた。

机の上の時計を見る。もうすぐ午前零時。

どうせなら雪が良かった、と彼は思った。

雪ならその事を手紙に書けた。今の彼女には、星は見れても、雪は見れないから。

雨も見れないけど、雨は自分が嫌いだから書きたくなかった。

彼は雨音が気になった。集中は途切れてしまい、しばらく手紙を書けそうにはない。

だけど、文面を考え続けた頭は冴えて、とても眠れそうにはない。彼は横の本棚に手を伸ばし、赤い大きめの本を取る。それを開くと、中には多くの写真。アルバムだった。

ページを数枚めくって、彼は手を止めた。一枚の写真に目を止めた。

少し幼い顔の真也と彼より背の高い少女の写真。『美空、ロンドンへ出発』と写真の下に書いてあった。

三年前、彼女は日本を旅立ち。二年前、地球を旅立った。

真也は、机の引き出しを開けた。そこには多くのエアメールの封筒が入っていた。

その中から彼は、迷う事無く、一枚を手取る。そして、封筒から手紙を取り出した。

\*\*\*真也君へ\*\*\*

もしかしたら、これが最後の手紙になるかもしれません。

二週間後、いよいよ宇宙ステーションに行くことになったんだ。

ウチのお母さんの話、いつも急で本当に困る。一年前も、そうだったよね。ゴメンね。

そして、今でも約束守ってくれてること、本当に嬉しい。  
それと、あの約束を続けてもイイかな？

ロンドンと違って、宇宙にはポストはないけど、手紙を書き続けたいと思う。

そして、次に会える時に直接渡したい。

嬉しかった事、楽しかった事、全部知って欲しいから。

だから、もし良かったら、真也君も書いてくれないかな？

多分、この手紙が届く頃には、私はもう地球にはいないから、返事は書かなくてイイから。

本当は電話しようと思ったんだけど、それは二人の約束破る事になるから止めとく。

いつも突然で、わがままで、困らせる事ばかりでゴメンね。

そして、次に会える時を楽しみにしています。

美空より

p s . 嫌だったら、気にしなくてイイからね。本当に。

真也は書き終えた手紙を、真っ白な封筒に入れた。そして、裏に日付と自分の名前を書いた。

表には何も書かない。彼自身が直接渡すから。

そしてそれを、同じような手紙が多く入った、小さな箱に入れる。美しい空色の箱、前にたまたま雑貨屋で見つけた。

絶対好きだろうな、と彼はその時思った。

まだ外は雨。時間はもうすぐ午前二時。

今日は星が見えない。

彼女が居る場所も見えない。

空を見る。

君がそこに居るなら、君がそこに居るから。  
空を見る。

空を見る。(後書き)

以上、「BUMP OF CHICKEN」さんの「天体観測」の  
その後をイメージして書いた作品でした。

皆様のイメージを壊していないとイイのですが…。

ちなみに、この物語はこれで完結です。

これがハッピーエンドかバッドエンドかは、皆様で想像して頂けるとありがたいです。

私としてはたとえハッピーでもバッドでも、二人の人生のエンディングはまだまだ先のことだと思っています。

それでは、

読んで頂けた方に、最大級の感謝を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3579/>

---

流星らびっと

2010年10月13日16時20分発行